

# マスコミのキーワード事典

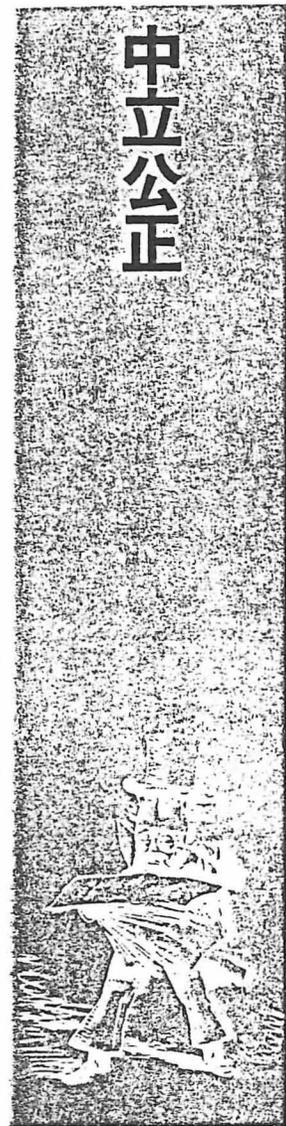
三点観測・マスコミの基本用語を検証する

猪瀬直樹／所ジョージ／橋爪大三郎

ノンフィクション作家

タレント

社会学者



## 中立公正

世の中には事実というものがある。意見というものもある。ならば事実と意見をきちんと分けて議論しようではないかというのが、そもそものジャーナリズムの出発点です。この基本がしっかりしていなければ、ジャーナリズムは成り立ちません。

独自に取材をし、知る値打ちのある事実や意見を集め、それを整理して、人びとに伝達する。その結果、人びとは世の中にどうという事実や意見があるかの正しい認識を

得て、それに対して自分がどういう判断をすればいいのかを知ることができる。というのがジャーナリズムの目的であり、役割ですが、ここで問題になるのは、伝えられた事実や意見にもし偏りがあつたなら、それは人びとの判断を狂わせてしまう、ということなんです。そこで「中立公正」を守るためにはどうしたらいいだろうか。誰でもがまず考えつくのは、いろいろな事実や意見をバランスよく紹介する、ということなんです。

しかし、実はこの先に、もっと大きな困難があるんです。そもそもいったい何を根拠にそれを「事実」と決めるのか。だいたいいにおいて事実というのは、膨大で無定形でわけがわからない。それを報道は、新聞の限られた紙面やテレビの限られた時間の中に、順番をつけて、大小をつけ並べていなくてはならない。ここで、その事実の値打ちを決めるのはメディアですが、決定にあたっては、そこにどうしても主観が入らざるをえない。第三者としてふるまうはずであったメディアが、ここでは突如として重要な当事者として姿を現わしてくるんですね。

点から取材しているんだということに、つねに自覚的になることです。あくまで自覚したうえで、客観的な「事実」となぜそれを取材し世の中に知らしめたかったのかという部分を「意見」という形で振り分けて掲載する。

新聞記者の「記者」は「ライター」、つまり記事を書く人ですね。記事を書く人というのは、自分の判断で事実を集めてこれらる人、自分の意見を新聞に発表できる人という意味ですから、署名記事が原則です。そして、そういう記者が集まって新聞社を作るのが、新聞の本来の姿です。ところが、日本の新聞には署名記事が非常に少ない。彼らは筆一本で食べていける記者ではなくて、サラリーマンなんです。だから、会社を離れては何もできない。

日本でも明治時代はこうじゃなかったんです。雨後のたけのこのように新聞があり、記者たちはペン一本で各新聞を渡り歩いては、自分のネームバリューだけを勝負に記事を書いてきた。それが読売新聞が全国制覇をなしとげ、競争で紙が配給になって、一県一紙になってしまつてから、新聞は会社が発行し、記者になるためには就職しなければならぬ、ということになってしまつたんです。

純粋に客観的な報道はありえない。その

ことに自覚的になれというのは、個人のジャーナリストに限りません。新聞社という組織も同じです。それぞれの新聞社がそれぞれカラーがあり、それぞれ主張があるのは当然ですが、ここで重要なのは、全体として言論の自由が守られているか、ということなんです。

それでは言論の自由とはなんなのか。一言で言つて、言論のことは言論で決着するというルールを守ることです。そして、それが突然数の論理になったり、札束の論理になったりしないこと。A新聞はこう言つたがB新聞はこう言つたとか、意見に違いがあれば、とことん論議をつくしていく。そうやって、各紙が集まって言論の自由が成り立っているならば、個々の新聞は独自の主張があつてもいい、むしろ、積極的にあるべきなんです。

ただし、テレビの場合は、ちょっと事情が違います。地上波は限られた数しかありませんから、電波の公共性ということも考慮して、免許制になつていて。特定のカラーを持つたり、特定の主張や意見ととにかく関係があつてはいけない約束になつていて、個々のプロデューサーやディレクターが意見を持つのはいいけれど、バランスの問題として、局全体が特定の主張を持つてはならない。

ですから、報道局長という立場は、このバランスを考える人だつたんです。彼が個人として意見を持つのはかまわないけれど、役目としてはバランスをとるべきだから、自民党に不利な報道があつたら、逆に自民党に有利な報道も入れておくとか、そういうことを考えなくてはならない。その点から言つて、彼はルール違反を犯したんです。

だから、例えば彼がプロデューサーとして、自民党の政権担当はもう限界である、そろそろ新しい勢力が出てきたほうがいいという立場から一つの番組を作るのは、まったく自由です。ただし、その場合は、彼が責任を持ち、名前も出して、番組の意図をはっきりさせるべきだった。そして、その一方で、テレビ朝日は自民党にもていねいな取材をする。国民にとつても、そのほうがずっと有益です。

現在のところ、テレビは新聞と違って、バランスを考えた報道をしなくてはならない。ただし、これからはケーブルテレビの時代です。テレビも局ごとに主義主張があつてもかまわない、という時代がゆくゆくはやってくるんじゃないでしょうか。来てほしいですね。

(橋爪大三郎)

まず最初に言っておくと、「中立公正」をセットにした言葉は存在しないんです。「中立」という語は、放送法には出てこない。しかも、「中立公正」の意味自体、間違ったイメージに錯覚されて流布されてしまっている。

「公正」というのは、英語に訳せばフェアネスですね。「バランスをとる」という意味も含まれているけれど、一言で言うならば、やはり「フェア」。そして、次に問題になってくるのは、何をもってフェアとするのか。例えば自民党二三〇議席で共産党十五議席だとしたら、テレビの放送時間を一対一にするのがフェアなのか、二十三分対一分三十秒にするのがフェアなのか。これ一つとっても、なかなか単純にはいかない、奥行きのある問題だということがわかるでしょう。

放送法第三条に「報道は事実を曲げないですること」という項目がありますが、事実を曲げるようなことがあれば、それはやはりフェアではありませんね。片方の言い分だけしか聞かないとか、当事者に裏付けを取らないとか、そういうことはフェアとは言えない。事実に基づくということはとても重要なことなんです。ただ想像して書くだけだったら、なんでも書いてしまう。小説ならそれでもいいけど、ジャーナリズム

いいかげんバカにしてるよね。あそここの局はあの政党に肩入れしたじゃないかとかっていろいろ言ったりするけど、テレビにいっぱい映ってるから、じゃあ、あそこに入れようかと思うほど、みんなはバカじゃないと思う。

いくらたくさん出てたって、やっぱりその人となりを見たりとか、政見放送で政治的意識を確認したりして、投票するもの。対立候補のこと悪く言ってたって、これはわざと悪口言ってるんだなってわかるし、みんながテレビの言いなりになつてると思うほうが、ちょっとおかしいんじゃないかな。

だから、テレビは中立公正にやってないじゃないかなんて文句つける議員も、テレビ見てる人をバカだと思ってるの。幼稚園児が見てると思ってる。幼稚園児だったらいっぱい出てる人に、「あっ、この人見たことある」って入れちゃうかもしれないけど、こっちはちゃんと大人が見てるんだからね、そんなにバカじゃないよって。テレビより、見てる人のほうが、ずっとえらいんだから。

よくあるでしょう。親が苦労性で、子供が出掛けるときに「あれ持ったか、これ持ったか」って言う。あれって、相手が子供だと思ってるから言うんだけど、子供は子

は事実を伝えなくてはいけないんですから。僕の経験でいうと、データの量や取材する相手などある程度の数をきちんと追っていけば、たいがいの事実は出てくるんです。量は質を規定するところがあって、この量をなめてる人間が、困ったことに意外に多い。十人会って、十一人目に違う話が出てくることは、珍しいことではありませんからね。きちんと事実の裏をとること、そうやって事実を曲げないこと、それが「公正」につながる道だと、僕は思っている。

現在の放送法第一条には「放送の不偏不党、真実及び自律を保障すること」によって、放送による表現の自由を確保すること」とあって、「不偏不党」によって「表現の自由」が守られると言っているんだけど、これは昭和二十三年に国会に提出された原案のほうが、日本語としてわかりやすいんです。

「放送を自由な表現の場として、その不偏不党、真実及び自律を保障すること」。つまりここでいう「不偏不党」とは、権力が右にいても左にいても、国民の利益のために、その立場を歪められることはないということ。

政府はたくさん情報を持っていますから、マスコミは、どうしても政府の公営機関のようになりやすい。情報やニュースも、政府はあらかじめ並べて発表してきますか

供なりに遠足のときなんかにはちゃんと自分の計画があつてき、バナナは持ったぞとか、いろいろ考えてたりする。忘れ物したらしたで、ああ、オレってバカだな、ちくしょうってくやしがつたりしてね。それな

## 報道の自由

報道の自由というのは、言論の自由の一部なんです。まず個人の思想・信条の自由というものが、それをどういうふうに表示してもいいという表現の自由がある。ただ、たとえ表現をしていても、誰にも知られないままであつたとしたら、社会的な影響力はゼロですから、それは何もしなかったことと同じになってしまう。そこで、それを第三者に伝える報道の自由というものが必要になり、これらが順調にかみ合つて初めて、言論の自由というものは守られたと言えるわけです。

言論の自由の中で新聞社やマスメディアが担当する部分が報道の自由ですが、これらのメディアが生まれたのは、いまから二百年ほど前、ちょうど民主主義が成熟して

らね。それに対して、待てよ、おかしんじゃないの、とつねにチェックの目を光らせるのが、不偏不党であり、公正であるということなんです。この「不偏不党」が「中立」と勘違いされてしまったんです。国会でも間違つた使われ方をされてきたけれど、「不偏不党」の本来の精神は、「中立」とはまったく違うものなんです。

事実を追い求めることである偏りが生じることが、もちろんありえます。だけど、そこにいろいろな真実が入っていれば、それは必ずしも公正からはずれるものではないと思うんです。たとえばゼネコン汚職の問題がありましたね。調べれば調べるほど、汚職した代議士に不利になっていたりする。それを偏向だと言う人もいるかもしれないけれど、もしきちんとした裏付けがとられたうえで「偏向」ならば、「偏向」であつたとしても、それは悪い「偏向」とは言えないんじゃないか。

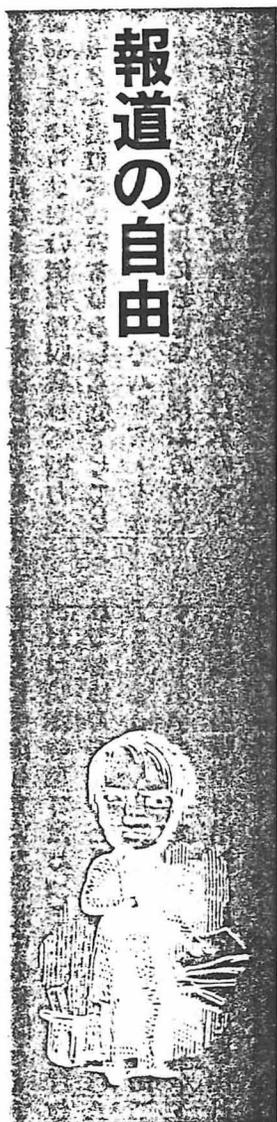
テレビの番組は一つではないし、新聞だって雑誌だっていろいろ種類がある。一番困るのは、それらが全部同じになつてしまふことなんです。なんにせよ、一色になることは一番いけないことですからね。

(猪瀬直樹)

それって、テレビを見てる人たちのこと、

のに、「バナナ持ったか」なんてわざわざ言われちゃうと、ほっといてくれって思っちゃう。そんなようなことだよ、こういう問題って。

(所ジョージ)



きた時期でした。ですから、報道の自由とは、民主主義の枠組みを維持するために新聞に与えられた権利であるとも考えられるんです。

主権者である国民が、代表として政治家を選ぶ。政治家は選ばれるさいに公約というものをしますが、人間は約束を破る生き物ですから、本当に約束どおりに政治を行っているかどうかはわからない。しかし、国民は忙しくていちいち見張っているわけにはいきませんから、国民に代わって政治家が何をしているのかを監督し、報告してくれる人を雇った。それが新聞だったというわけで、これが新聞が第四の権力と言われるゆえんです。新聞は、国民の委託を受けている国民の権利の代行者であり、報道

の自由は、国民の権利を守るためのものな  
んですね。

ですから、それは、権力からはつねに独  
立し、権力にコントロールされないでい  
る必要がある。そのためにはいくつかの条件  
があつて、まず第一に挙げられるのは取材  
の自由。知る価値のある情報だと思つたら、  
新聞記者の腕章をつけた人は原則的に、公  
的な場所ならどこにでも入っていい。新  
聞記者は国民のメッセンジャーであり、国  
というものは、国民の委託で動いているもの。  
政治家と新聞記者との定例記者会見がひん  
ぱんに行われるのも、政治家には国民の質  
問にはきちんと答える義務があるからです。  
ただし、正面からおおびらに取材をし  
たからといって、相手がなんでもかんでも  
しゃべってくれるものでも、もちろんあり  
ません。そこで、新聞記者は正面からの取  
材とは別に独自の取材をするわけですが、  
このときに重要なのは、内部からの情報で  
す。例えば政治家が裏でしていることのひ  
どきを秘書が見るに見かねて新聞社にこっ  
そり投書する。ひそかに会つて教えてくれ  
る。それが事実であつたならばスキャンダ  
ルになるわけですが、そういつたことをし  
てもいいということは、国民の権利として、  
取材の自由とは違ったレベルで保護されな  
くてはならない。これが情報源の秘匿の問

題です。

この情報源の秘匿は、なるべく黙ってい  
たほうがいいというようなものではなくて、  
新聞記者として、絶対にはしゃべってはい  
けないです。裁判所に召喚され、「あなたは  
この事実をどこから聞きましたか」と聞か  
れた場合でも、話してはいけません。その結  
果、法廷侮辱罪とかなんとかで、その新聞  
記者は有罪になるかもしれない。それでも  
しゃべってはいけないというのが、民主主  
義国家アメリカの新聞記者のルールです。  
裁判所も権力ですからね。牢屋に行くこと  
になつても、逆に名譽なことだと考えられ  
ているほど、取材源の秘匿というのは大事  
なことと考えられている。もしこの点がい  
いかげんになつてしまつたら、内部通報者  
の協力がえられなくなりますからね。そう  
なれば、マスコミの情報収集して権力を  
監視する能力が、いちじるしく低下してし  
まう。

ところが、この点において、日本のマス  
コミには少し問題があります。日本のマス  
コミは情報源の秘匿に関して、あまり熱心  
ではない。情報源の秘匿のために喜んで監  
獄に行こうという記者も数が少ない。いつ  
だつたかある記者が外務省の内部からもら  
つた情報源について、裁判でべらべらしゃ  
べつてしまったことがあります。おかげ

で通報者の方が守秘義務を怠つたとかで有  
罪になり、社会的に抹殺されてしまつたわ  
けですが、こんなことはジャーナリストと  
してもつとも恥ずべき行為でしょう。記者  
を志す以上は、このくらのことは覚悟し  
てもらわなければ困ります。

いまの日本の記者が何をやっているかと  
いうと、まずみんなでスクープをなくした  
んです。よそでスクープされてしまつと、  
出し抜かれた記者は上司に怒られる。です  
から、情報は記者クラブで同時に聞くわけ  
で、一緒に聞いて、そろつて官庁の言うこ  
とをうのみにする。こんなことは一種の自  
主規制であり、内部コントロールでしか  
ないんですから、即刻やめて、自由競争に  
すべきですね。さもないと、大本営発表を唯々  
諾々として流していた戦時中の新聞と、い  
まだつてたいして変わつてない、そう言わ  
れても仕方がないと思います。

(橋爪大三郎)

いので、結局「出版の自由」に。ところが、  
この「フリーダム・オブ・プレス」は、ア  
メリカでは「報道の自由」のことだつたん  
です。

「報道の自由」というのは、政府が隠して  
いる事実ほとんど取材してもいいし、事  
実に基づいてであれば、それをどういふ  
うに表現してもいいということです。とこ  
ろが、日本ではその意味がよくわからな  
かつたために、本来「報道」には放送も新聞  
も入るはずなのに、条文では「出版」と限  
定されてしまった。そして、そのために日  
本には、アメリカには作られた情報公開法  
が作られなかつたんです。自治体レベルで  
の情報公開条例はあるけれど、国家レベル  
での情報公開法はいまだに制定されていま  
せん。

ところが一方、公務員の守秘義務とい  
うのは、ずいぶんきつちりと義務づけられて  
いる。もちろん国の利益のために他国に知  
られてはならない秘密は、国家として最低  
限保持しなくてはならない。けれど、それ  
は、非常に制限されたものであるべきなん  
です。

にもかかわらず、日本の場合、守秘義務  
はあらゆることであつて、簡単な情報で  
も教えてくれなかつたり、見せてくれな  
かつたりする。憲法二十一条が正しく理解さ

れていけば、必然的に情報公開法もできる  
はずですから、政府の持つている情報を「知  
る権利」だつて、いまよりはつきりしたも  
のになつていたに違いない。つまり、日本  
は「フリーダム・オブ・プレス」を誤訳し  
たときに、文字面だけでなく、その精神も  
一緒に誤訳してしまつたんです。

われわれにとつて、言論の自由は、自分  
たちで勝ちとつたものではない。アメリカ  
からもらつたものだから、本当のところ、  
意味もわからなければ、使い方もわかつて  
いないんです。つまり、ちゃんと自分のも  
のになつていない。アメリカからもらつた  
ものは、このごろなにかと評判が悪かつた  
りするけれど、それでもちゃんといいもの  
は残して、使いこなしたほうがいいと思  
います。

なんとといっても、アジアの国々の中で、  
言論の自由があるのは、日本だけなんです  
から。アジアの中でなぜ日本だけが先進国  
サミットに参加できるのかといえば、単に  
経済力があるからだけではない、言論の自  
由がそれなりに保障されているからでしょ  
う。サミットにロシアが入れないのは、基  
本的な人権や言論の自由についての保障が、  
まだ整っていないからです。議会に対して  
大砲を打つエリツインのような人は、あく  
までオブザーバーとしてしか参加できない

のは当然です。アジアでわれわれだけが持  
つている言論の自由、報道の自由をもつと  
大事にして考え直す、いまはいいチャンス  
なのかもしれません。

(猪瀬直樹)

「自由」つて言つた時点で、すでに自由じ  
やないんだね。自由を訴えて、枠を作つて  
るようなもの。自由つて、言い出さないこ  
とじゃないの？「へア解禁だ、よし、われ  
われは自由を勝ちとつたぞ」つて言つて  
も、それつて、自由でもなんでもないよう  
な気がする。自由のために立ち上がるなん  
て、なんて不自由なんだ。自由なんだつた  
ら座つていたい人だつているし、寝ころ  
がつていたい人もいる。ボクもいやだな、  
立ち上がるのは。だつて、自由でいたい  
から。

やつちやいけないつて言われたら、おか  
みには楯突いちゃいけないんです。「はい、  
わかりました」と言つてその中で自由を探  
せばいいじゃない。ボクなんかは、いまま  
でずっとそうしてきたもん。学校で校則曲  
げようなんて思わなかつたし、芸能界に入  
つてもルール曲げたいなんて気はさらさら  
ない。でも、決められた中で自由にやつて  
るから、全然不自由じゃないの。

戦争中？ いいじゃない、ウソのニュー

ス流れてたつて。本当は負けてたつて、勝つてんだという気持が楽しかつたんだから。いまだつて、われわれが選んだ政治家なんだから、疑うほうが間違つてる。もしも悪事が出てきたら、そのときコノヤローつて思えばいい。

だつて、悪いことには誰かだつて悪いことだつて、いいことだつていっばいある。政治家だつて、いままでががんばつてきたから道路ができたりしたわけでしょう。まあ、ボクなんかルールがまったくわかつてないから、平気でいい加減なんだろうけど、いま問題になつてるコメなんかもどつちでもいいじゃない、なんて思つちやう。無責任なようだけど、どう思おうと、ボクの自由だから。

ちよつと話が違ふけど、おコメに関しては、日本の農家が守られてることが不思議だよ。農家だけ守られて、どうしてワタシは守られないの？ ボクのテレビの出演本数が減つて、一本の単価を上げてくれるのかつて言つたら、人気がないつてことで、かえつてギャラは減つちやうよ。その点、農家の人はノーリスクなわけじゃない。自然相手にノーリスクなんて、そんな自然とのつき合い方はないよ。うわつ、冷害だ、ガクーン、ていうのが自然とつき合つてゐる実感でものなんだから。

白日のもとにさらされてしまふ、そうしたことがないとは言えない恐ろしい国が、この日本です。

例えばロス疑惑のMさんという人がいましたね。Mさんは有名人でもなんでもなかったけれど、ある雑誌がある事実と思われなことを報道したために、一躍渦中の人となり、スターかなにかのように取材合戦が繰り広げられて、彼の人生はそれまでとはまったく違うコースをたどる結果になつた。刑事上の疑惑という形をとつていたので、いかにも報道の体裁をなしていましたが、これは国民の知る権利とはまったく無関係なジャーナリズムの逸脱だつたと、私は思つています。

ああした取材合戦というのは、本来権力者だけに向けられるべきものです。ただし、公人といえども国民の一人ですから、ほかの国民と同じようにプライバシーの権利も持つてゐる。国民の知る権利の対象になるのは、公人のうちの公的側面、公的行爲だけ。具体的に言えば、税金を納めたかどうか、どういう資産を持つてゐるのか、特定の企業とどういう関係にあり、企業などのような役職についてゐるのか、学歴や経歴も含めて公的な個人情報については、われわれの代表として、国民には知る権利がある。

そうなつたら、自由とは言えないね。保険がくつついてる会社員と同じ。畑仕事してても、サラリーマン。せつかく土との自由な交流を楽しんでたのに、会社の一部になつちやつたりして、いやにならないのか

## 知る権利

知る権利の主体は国民であり、この権利を守るために報道の自由があつて、マスコミジャーナリズムが活躍する、というのは改めて言うまでもない話ですが、では、国民はどういう目的があつて、物事を知るのでしょうか。それは、正しい決定をするため、正しい判断をするため、有権者として賢明にふるまい投票するためです。それ以外のことは、単なる好奇心を満足させるため、あるいは勉強してもつと世の中のことを知りたいということであつても、あくまで個人個人の知的な願望に過ぎなくて、知る権利とはあまり関係がない。

では、選挙の判断材料になるような知識とはなんでしょうか。一言で言うならば、公人、つまり政治家や政治家をとりまく人

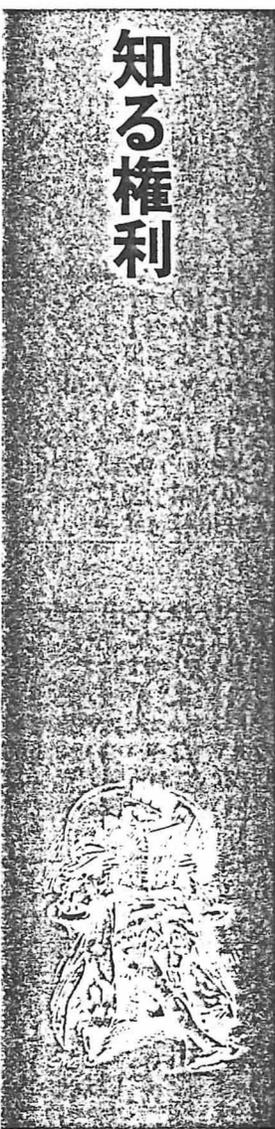
それに対して、しめてゐるネクタイはどこで買ったのかとか、どんな食べ物が好きかというようなことは、本人がしゃべりもしないのに勝手に調べたり書いたりしていいことではない。ところが、日本のジャーナリズムはワイドショー型になつてゐますから、国民の知る権利とは無関係のところから取材合戦が繰り広げられることが多い。

これは、ジャーナリズムというよりも一種の商売なんですね。国民は好奇心による知りたいという欲望を持つていて、その一方では、自分のことを人びとに知られたいと思つてゐる人もゐる。そこで取引が成立して商売になるわけで、これをテレビや新聞がメディアの活動として行つてゐるために、ジャーナリズムと商売が混乱してしまつた。知られたい人というのは一般には有名人、自分のことを国民に知ってもらわなければ仕事にならない人たちですが、言つてみれば、一般大衆と有名人との共犯関係が、ここでは起こつてゐる。

そういうメディアが中にはあつてもいいけれど、それでもそれは一流のジャーナリズムとは言えませんね。イギリスなんかではダイアナ妃のレオタード姿をすつぱぬく三流メディアもあれば、そんなことは絶対にしない一流のメディアもある。日本では「文藝春秋」と「週刊文春」は一緒の出版社

な。報道の自由ねー。そんなこと言つてるのが見狭いよねー、なんてボクは思うんだけど。

(所ジョージ)



びとや国家のさまざまな出来事についての知識です。決して国民一人ひとりについての知識ではありません。私人はプライバシーを知られない権利を持つてゐますから、知る権利といえども、これを冒してはならない。それに対して公人は、例外的に知る権利が優先する。公人と私人を分けるこの線を、まずきつちりと引くことが大事です。

ところで、この「公人」ですが、有名であれば公人であるかのごとき誤解をしている人がときどきいますね。雑誌やテレビに取り上げられる機会が多くても、有名人や芸能人と公人とはなんの関係もありません。にもかかわらず、有名人や芸能人ばかりかときには一般人までがジャーナリズムに追つかけて回されて、個人的なプライバシーが

から出てゐるし、同じテレビ朝日の中に「こんにちわ2時」もあれば「ニュースステーション」もある。メディアごとの役割や性格がどこか曖昧なのが、日本のジャーナリズムなんですね。

(橋爪大三郎)

知る権利というのは、あくまで公権力に対しての話なんです。われわれは行政機関にほとんどゲタを預けていますから、税金が正しく使われているかどうかをチェックするのは、ジャーナリズムの役目です。アメリカなんかは自己申告ですから、国家にみんなでシヨバ代を払つてゐるといふ意識を誰もが持つてゐるけれど、日本のサラリーマンは給料から税金が天引きされるために、どうもそういう認識が甘い。でも、本来は役人という公僕を国民がみんなで雇つてゐることをさせてゐるんですから、政治家が不正をしたとすれば、それは自分の金をネコババされたと同じことなんです。われわれははじめから日本に住んでしまつてゐる、天皇がいて国家がアプリーオリにできてしまつてゐるから、あまり意識してゐないけれど、そのあたりはもつと合理主義で考えたほうがいいと思ひます。

ですから、誰が脱いだとか、結婚したとかいうことは、知る権利には関係ないんで

す。われわれは芸能人に対して税金を払っているわけじゃないから、彼らを追い詰める権利はない。基本的人権というのは非常に大切な問題で、やっぱりマスメディアは、これを傷つけてはいけないんですよ。

もちろんプライバシーの部分の追い詰められないのは、政治家も同じです。ただ、屋敷の池に何百万もするような錦鯉を飼ってれば、それをどうやって買ったのか、疑問を抱いてもかまわないでしょう。私人としての生活の中に公人からの密輸入があったとすれば、そのことを知る権利は、国民にはあるんですから。

知る権利を混乱させているのは、やはりマスメディアの低級な部分でしょうね。マスメディアは有名人を作り上げる。作っただけで、それをまたからかうという構造が、いまのマスメディアの情けない現状です。ちよつと話がそれますが、マスメディアが作り上げた最大のヒーローは、力道山とミッチーでしょう。力道山の試合と美智子さんの結婚式からテレビは普及したんですから。力道山は死んでしまったけれど、美智子さんはいまも生き続けて、メディアの中のヒロインとしての宿命を背負わされている。ついでに言うと、彼女は女神なんですから、事実でないことを書かれたとしても、反論しちやいけなかったんです。反論

たうしろを見ると、ゴミばかりが散らかっていることになっちゃうよ。

だから、みんなが最初から、自分の価値観を変えないでいけばいいの。知る権利と

## 自主規制

自主規制というのは、報道機関が報道の自由と権利を放棄するわけですから、国民から見れば裏切り行為だし、マスコミにとっては自殺行為です。

が、しかし、にもかかわらずなぜ自主規制が行われるのか、その構造を考えてみると、自主規制に対立するものとして、まず検閲があるんですね。検閲は、報道機関が報道する内容を事前にチェックする。チェックしてもしも問題があつた場合は、一部はそのまま報道させるけれど、一部は差し止めたり、書き換えさせたりする。検閲は報道の自由と正面からぶつかりますから、基本的にはやってはいけないことになつていくんですが、都合の悪いことが報道されることもありますから、権力というのは内

したりすれば、女神はただの芸能人になってしまう。半端な有名人には反論する機会を与えてあげるべきだけれど、神様級の有名人は、すでに人権さえも超越してしまっているんですからな。

(猪瀬直樹)

なんか下品だよ、知る権利って言葉が。自分には知る権利があるとか、人が私に対して知る権利があるとか、どっちにしてもそんな権利なんかないんじゃない。

だって、知る知らないって、当事者同士の問題だもん。それをはたで聞き耳たてて、「オレには知る権利があるから教える」とか言われたって、そんなのわかんない。「おまえになんか教えてやんないよ」とオレは言うよ。自分でも教えないから、オレはオレには知る権利があるなんて、ゼツタイ言わない。それでも人のことあれこれ知りたいた品なことが好きな人もいるし、そこそこで商売してる人もいる。いいんだよ、そういう人たちはみんな一緒に地獄に落ちちゃえば。

ボクだって、勝手なことされれば怒りますよ。ボクの知り合いとか娘とかかみさんに対して、勝手に知る権利を主張されたら、ふざけんじやないよって、相当怒ると思う。そんなにまで怒んなくてもって言われるく

メなんだから。みんな、自分のことで忙しくないんだらうか。経済を発達させない本当の原因って、案外こんなところにあつたりして。

(所ジョージ)



心では検閲をやりたいなあと思っていたりする。

そこで権力は、出てきたものを後からチェックするのではなくて、初めから都合の悪いことは書く気をなくさせる、という作戦をとるんです。この場合、たいてい使われるのは免許ですね。免許を与えるということとは、取り消すこともあるわけですが、どうしたって政府に気兼ねして、都合の悪いことは書きにくくなる。そうやって、自主規制や自粛が起こってくる。

いま、この免許制度に明らかにしぼられているのは、ラジオやテレビですね。新聞はこの点はあまりはつきりしていませんが、出版はわいせつなどで検挙されたりすると、取次店の取り次ぎを停止される場合があつ

らい、すつごく怒るんじゃないかな。

人には出したいくないものだってあるんだもの。それを知る権利なんて言われちゃかなわない。誰が「権利」の前に「知る」なんてつけたんだらうね。そんなの、人として正しくないですよ。

よく政治家の人になんばってもらわないと不況は乗り越えられないなんて言うけど、それって違うよね。家で言えば、「日曜日にお父さんどこか連れてって」って言うようなものだもの。お父さんのやりたいこととお母さんのやりたいこと子供がやりたいこととそれぞれを話し合って「今日はこうしよう」って決めるのが正しいのに、「どこか連れてって」は、お父さんに託しちゃってるだけでしょう。政治だって、一般の人たちが案を出さなかったら、不況だってよくないわけじゃない。だれかにオンブして、全部やってもらおうたって、うまくいくわけないんだもの。

みんな、すぐ隣と比べて、はやってるものに乗乗するんだよね。はやる前から好きでやってた人たちは確実な価値観を持ってそれをやってたわけだから、はやりが去っても、その価値は減びない。ところが途中でやはりだからって便乗した人たちは、やはりが終わると、すべてはゴミになっちゃうわけ。そんなことしてると、自分が生き

て、そこから自主規制が働くこともある。そして、もう一つ、免許と違う奥の手として、広告があります。新聞雑誌テレビにとって、広告は生命線ですね。広告主がそっぽを向く危険性があれば、そこでもなにがしかの配慮が働く可能性はある。広告を取り仕切っているのは、大手広告代理店ですから、大手広告代理店と政府がツーカーである、という関係がもしあれば、政府は間接的にメディアをコントロールすることができます。そうやって、自主規制はいろいろな形で起こりうるんです。

これに対して、報道機関が自分の判断で自主規制をすれば、それが許されるのは、非常に大きな国民の利益がそのことによつて守られる場合に限ります。

具体的には三つの例を挙げましょう。一つは、わいせつの問題です。これは法律でも規制されていたりしてややこしいのですが、子供が見やすい時間にテレビでそういうものがジャンジャン流れれば、やはり国民は迷惑しますから、自主規制がメディアによつて行われても、これは仕方がありません。

二つ目は差別。差別はなくすべきであり、差別を助長しないようにメディアが考えていくのは、当然の義務でしょう。しかし、いまのメディアがやっている差別語を使わ



意味が伝わってなかったら、それは言わなかったのと同じだと思ふ。人にものを頼むって、そういうことだね。頼んでやってもらえなかったら、説得力のない自分を悲しまなくちゃ。自主規制で盛り上がったのって、そういう話に思えるんだけど。

## やらせ

やらせというのは、マスコミジャーナリズムが、自分の作為でわざわざ特定の「事実」を作り出すことです。取材というのは、先に事実があるから成り立つもので、取材に都合のいいように事実を作り出したのであれば、それは事実とは言えない。ですから、やらせはジャーナリズムの自殺行為です。しかも、やらせがあったことが発覚すれば、ほかの正しい報道までやらせだったのではないかと疑われて、その報道機関全体の信頼性が失われていく。やらせが悪いというのは、明々白々、議論の余地もないんですね。

ただ、問題は実はその先にあつて、やら

ルールに気を遣うんじゃないくて、人に気を遣えばいいんですよ。人に気を遣って暮らしてれば、自主規制なんて問題には、ホントはぶち当たらないんじゃないかと思うけど。

(所ジョージ)



せをジャーナリズムが自覚してやっている場合はまだ罪が軽い、という言い方もできる。というのは、ジャーナリズムにはすべて、取材し報道することによって事実を作り出す、という側面がないとは言えないからです。

簡単な例をあげましょう。人類学にも「参与観察」という言葉がありますよね。例えば村祭りの取材をするのに、第三者の伝聞によつたりしないで、自分がその村祭りの現場に行つて、一緒に盆踊りを踊つたり、ごちそうを食べたりする。もちろん現地の人には、いつもと同じようにやつてくださいとお願ひするんだけど、カメラがある、

もっと慎重に調べればわかるにもかかわらず、裏付けをとらなかつたために起こってくる過ちですからね。

マスメディアは、結果的に人を裁いてしまつています。裁判所では弁護士と検事が長い時間をかけて証拠書類を照らし合わせ、討論して、結果を出す。日本の場合、裁判は時間がかかりますから、やむをえない部分もあるんですが、下手をすると、裁判をやっている最中に、マスメディアが勝手に人を裁いてしまつたりするでしょう。それだけに、これで文句あるかというくらい調査し、裏付けをとつていかないと、大変なことになりかねない。それだけの裁判機能を背負つてしまつていくわけですからね。

ただし、そうは言つても、ニュースは毎日どんどん入ってきますから、ときには間違えてしまうことだつてなくはない。そこで、僕は「ラストニュース」という劇画をフィクションで作つたんです。あそこに出てくる「ラストニュース」は、ニュースの中のやらせや誤報、変更なんかをその日のうちにチェックし直そうという、訂正と検証の番組なんです。やらせに対する一種の自浄作用をテレビ局自身が持つようにと、一日の最後にそういった番組を置く。どこもそういったものを作ろうとしないから、僕が劇画でやってみせたわけ。

記者が来ている、いつもと違うなにかがある。で、つい意識しちゃつて、取材対象に変化が起こる。これを「参与効果」と呼ぶんです。もっと身近な例でいうと、写真に写されるとき、普段とまったく同じ表情でいられる人は、なかなかいないでしょう。というように、取材というのは、現実や事実を変容させる力を持つ。やらせはこの力の一つの極端な形であるとも考えられて、もしやらせがいけないとしたら、取材する側にとつて、この取材による現実の変容とどう向き合うかという問題が残るんです。こうした現象があるにもかかわらず、事実を事実として取り出すためにどのような方法があるだろうか。とりあえず考えられる方法には二つあつて、一つは、取材している事実を隠すこと。カメラだつたら隠し撮り、記者だったら名乗らない。そうやっていかにも自然に、ゆきずりの人という顔で事実を収集していくんですが、これはかなり問題のあるやり方ですね。記者じゃないと思つてペラペラしゃべつたら、記事にされてしまった、撮られたくないところを撮られてしまった。そういうことが起こりがちで、決してフェアな方法とは言いがたい。

もう一つは、取材されていようといまいと、そのことに左右されない強固な対象を

やらせを考える場合、どこまでがフィクションでどこまでがノンフィクションか、その境目が難しいとはよく言われることですが、こういうことは、抽象論でやるとわけがわからない議論になつてしまふんです。やつぱりケーススタディでやらないといけない。

例を挙げると、湾岸戦争のときに、海鳥が油にまみれている映像がありましたね。映像を撮つたイギリスのニュースカメラマンは、ただそこにあつた事実を撮つただけなのに、いつのまにかサダム・フセインの仕業だとされて、全世界にバーツと広まつた。別にサダム・フセインをかばうつもりはないけれど、でも、あれは決してフェアなやり方とは言えなかつた。矢ガモなんかもそうだけど、動物が絡むとどうも人つて感情的になるものらしいのね。悪いやつにもいろいろあるのに、短絡的でわかりやすい悪者像が作られてしまふ。しかも、一年後にわかつたのは、あの油はアメリカが壊したタンクから流出したものだつた。だから、速報性というのはおもわぬ落とし穴がある、怖いものなんです。

もう一つ例を挙げると、これも湾岸戦争のときなんですが、一人のクウェートの少女がアメリカの公聴会で証言をしたんです。自分は命からがら逃げてきたけれど、クウ

選ぶこと。ただし、そうなると相手はプロ化した有名人か面の皮の厚い政治家かということになつてしまつて、取材対象がかなり狭まつてしまふ。けれども、この二つでカバーできないとき、現実には必ず歪んでしまふんです。これはどうしても避けようがない。

しかし、こうした問題があるにもかかわらず事実に基づく方法が、もうひとつだけあるんです。それは、国民が、取材というのはこうしたバイアスを与えるものだという予備知識を持つて、取材された事実や現実に向かい合うこと。たまたま摘発されたやらせというのは極端なケースであつて、やらせ一步手前、二歩手前、百歩手前であろうと、取材にやらせの要素はつねにつきまとうものです。そもそも記者が現実を切り取つてくる時点で主観は入り込むわけですが、そのことを十分に認識して心構えを持つていくことが、この問題を最終的に防ぐ唯一の方法なんですね。

(橋爪大三郎)

やらせというのは、ある意味で誤報と近い場所で考えるべきだと思います。やらせは意図的にやるものですが、場合によつては、時間がなくてあわててやつた結果が、やらせになつてしまうこともある。誤報も